

成章館の武芸流派と指南

白 井 省 三

目 次

1. はじめに
2. 武芸流派
3. 指南または世話役
4. 二の丸宮絵家中射行
5. むすび

1. は じ め に

三河国渥美郡田原藩の藩校成章館は文化7年9月17日の開館より明治4年7月14日廃藩により自然廃校となるまで、約61年間存続した。田原藩における武芸は若干の例を除いて殆んど成章館で指導したので、成章館の武芸即田原藩の武芸とも言えるのである。

本稿は華山文庫（田原町教育委員会管理）に収蔵されている旧田原藩の日記類と其の他若干の資料により成章館の開館より閉館迄の武芸流派とその指南を明らかにせんとするものである。

なお本稿においては、原文に劔術、鎗術とあるものを除いては剣術、槍術とし、炮術、鉄砲あるいは火術は炮術とした。流派名は剣術が直心流と無念流の二流、炮術が荻野流、西洋流（高島流とも言う）外記流の三流があったので、それ等は、それぞれ流派名を記入したが、その他の武芸は一流のみであったので流派名は記入しないこととした。

2. 武 芸 流 派

文化7月9月17日の開館当時は、成章館扁額の裏書によれば剣術、槍術、柔術、居合、兵杖のみが課せられたが、文化9年には弓術が加わり、文化⁽¹⁾

9年には馬術が、天保4年には兵学が、天保8年には炮術が加わり、天保14年には銃陣も課せられるようになり一応これ等の諸芸が慶応元年迄は課せられていたが、洋式の兵式訓練の必要性により嘉永6年12月4日付で家中の士の武芸は鉾術、鎗術、炮術の三芸を専一にせよとの達し⁽²⁾を出した事が影響して、居合は慶応元年、兵杖は3年頃より衰退、槍術、弓術も明治元年には自然消滅してしまった。武芸の流派は明治初年の文部省進達書写(崋山文庫蔵)によれば鉾術直心流および無念流、柔術、居合直義流、弓術日置流、鎗術宝蔵院流、炮術荻野流(後に西洋流となる)、兵杖無比流、馬術高麗流⁽³⁾となっている。

剣 術

成章館は当初直心流のみであった。直心流は神谷伝心斎直光を流祖とする。田原への流入は詳でない。無念流は天保8年1月田原藩士となった杉山大助がこれよりさき天保3年田原に来て指導したのに始まる。村上定平(範致家名財右エ門)は最初直心流であったが、大助に師事して無念流を学び、江戸出府の際は無念流の達人斉藤弥九郎の門下となり、免許を得て天保8年より成章館無念流指南となる。これより直心流と無念流の両流が課せられることとなった。

直心流は他流仕合を尊重し稽古には竹刀を用いたが、他流仕合は木刀をもってした。ところが、なぜか田原藩では固く他流仕合を禁じた。村上定平が無念流に走ったのも原因は他流仕合の禁止によると言われている。愛知県史によると無念流が成章館に入ってから、直心流を圧倒したとある⁽⁴⁾が、慶応3年の指南および世話役は直心流4名、無念流2名で、その前後とも常に直心流の指導者が多く、明治3年以後は流派を問わないこととなっているので、無念流が直心流を圧倒した根拠は何もない。むしろ直心流が優位にあったものと思われる。

柔術・居合

柔術・居合ともに直義流である。全国で成章館のみで行なわれた流派で、武芸流派大事典によれば「三州田原藩の成章館で教えた。萱生六右エ門⁽⁵⁾が師範」とある。流祖は居組直義流免許状によれば、濱野弥兵直義であ

るが、田原藩御家中由緒書（崋山文庫蔵）にも其の名は見えず、何処の士か一切不明である。その許状は杉山莊九郎，川澄次左衛門，天野幸右衛門，萱生源左エ門，赤井彦右衛門の連署で萱生源左エ門から井上半吾（以上の士は田原藩御家中由緒書に載っている）に授与したもので、従って田原では杉山莊九郎が始祖であったと思われるが、後の研究にまつ他ない。

なお、六左衛門は天保10年に直義流柔術・居合の免許を得ているが、世話役としては天保9と10年の2年間のみで、武芸流派大事典の「萱生六左衛門が師範」との記述は間違いではないにしても、文化7年9月開館の時から文政5年7月死亡まで、途中半年間を除く12年半、直義流柔術・居合指南であった萱生源左エ門を始め、柔術・居合を合わせ延43名が指南または世話役を務めているので「萱生源左エ門等が師範」とした方が、より適切と思われる。

弓 術

日置流である。三河はほとんど日置流で、田原藩においても他の流派は見られない。成章館指南での出色は文政2年より万延元年まで弓術指南の地位にあった雪吹伊織である。雪吹はよほどの上手であつたらしく、文政12年3月17日藩主康直が家中の文武芸事を上覧した際、弓術の部で一人6射を行い、雪吹は皆中の成績を挙げている。又別表、二の丸宮田原藩総家中射行成績一覧に見る如く、断然他を圧している。

槍 術

宝蔵院流である。江戸時代もっとも広く普及した流派で、奈良興福寺の寺中宝蔵院の院主覚禅房法印胤栄が流祖である。田原への流入は不明である。

炮 術

成章館は最初は外記流と荻野流であつた。外記流は天保8年に課せられただけである。荻野流は天保5年10月18日藩士松岡次郎（130石御使番次席）の斡旋によって岡崎藩荻野流炮術師範井上空衛を田原藩に招き、炮術指導を依頼した。松岡は岡崎藩士那須猪太夫の二男で、田原の松岡家に養子した者である。その松岡の縁故により井上を紹介したものであると思われる。当日は藩主康直を始め家中の者は西新田に出張して井上の実演する荻野流

大筒・棒火矢・焙烙火矢などを見学した。井上は更に天保8年正月から3月4日まで松岡宅に逗留し成章館指南として炮術指導を行なっている。この間2月24日には波瀬村蒔大州において藩主康直臨席のもとに井上師範以下藩士の炮術検分を行なった。この時は火矢、遠町打、海岸防備用乱打、船打などを行なった。参加した門下生は雪吹伊織、丹羽長平、松岡蒔、斉藤寛吉、村上国助、中村玄喜、鈴木春山で4月には雪吹伊織、村上定平、斉藤寛吉、村上国助の4名が荻野流火術修行のため岡崎に通い稽古をすることを許されている。又井上は7月、9月、11月にも田原で火術指導を行なっている。(田原町文化財調査会編、田原町史中巻668頁、669頁参照)

荻野流は浜松藩本多豊後守の鉄砲頭荻野彦左衛門の二男六兵衛安重が編みだした流儀で、六兵衛は寛文7年に岡山藩池田光政に200石で禄仕し、後明石藩に200石で仕え元禄3年に78才で没している。従って流派の確立は寛文以前と考えられるが詳でない。

西洋流(高島流とも言う)炮術は村上定平が高島秋帆の門下となってから後、天保14年より成章館で行なわれるようになった。定平は天保12年3月江戸に出て高島流を学び7月に入ってから帰藩している。

田原藩御玄関置帳(華山文庫蔵)の天保12年3月21日の条に

1. 村上定平殿吹聴有之候ハ此節⁶5月中迄於江戸兵学修業仕度段御暇相願度候処、願通被仰付難有之旨吹聴。右明21日出立之旨吹聴有之事とあり7月10日の条には

1. 村上定平殿江戸修行先⁶今日帰宅ニ付当席被罷出吹聴之事明日助番へ出番之事とあって

この間彼は江戸に居住して修行した。が、これだけでは何の修行を誰についてしたのかわからないが、天保12年5月9日幕命により西洋流炮術家高島秋帆が武蔵の徳丸ヶ原で洋式の銃隊調練と西洋流炮術の試射を行なった時に出場した秋帆の門人100名の中に定平の名も載っていることにより、⁽⁶⁾その修行は西洋流炮術と銃陣で、師は高島秋帆であったことが解明される。

定平は天保13年4月27日長崎に居住せる師高島秋帆に西洋流炮術の件を

尋ねるため長崎に出張を願い出て許可された。同年の田原藩御 玄 関 置 帳（畢山文庫蔵）の 9 月 24 日の条に

村上定平殿去ル16日夜長崎修行先より帰着
とあり

片道一カ月は要したであろうから長崎滞在は実質 3 月くらいであったと思われる。

嘉永 3 年 2 月 14 日に西洋流炮術書（畢山文庫蔵）が村上定平から江戸藩庁へ提出され西洋流が重役間で検討された。一方荻野流師南の雪吹伊織も西洋流に改革することに賛成の旨を申し出た。この間の消息が同年の田原藩御用人方日記の 5 月 5 日の条に記載されている。⁽⁸⁾かくて炮術は西洋流となり、荻野流指南雪吹伊織は村上の門人となり、これまで雪吹が主軸であった炮術は村上を主軸とすることとなった。幕府が西洋流に踏切ったのが嘉永 6 年 10 月であり、それより 3 年半前に当り、まことに卓見と言うべきである。このことは田原藩玄関置帖（畢山文庫蔵）嘉永 6 年 10 月の条に

武術修業之儀、引立方等銘々存寄も可有之候得共炮術之義者、異国船防禦之要術ニ有之、諸流之内西洋打方之儀者近来開ケ候、事ニ付いまだ要熟致候者も少く候処、今般内海為御警衛西洋法ニ寄御台場御取建ニ相成候ハバ其の法術をも手広ニ可成置御趣意ニ候間、其心得ヲ以西洋打方習熟へ申談、諸流同様稽古相励候様、厚く可被申付候、右之趣、万石以上之面々に寄々可被達候

十月

とあるにより明らかである。

元治元年には、これまで混用していた火縄銃を全廃し西洋流雷管銃一本化に切りかえることとなった。このため成章館における火縄銃（荻野流）の指南、世話役を解任し、在来の火縄銃は私用としてのみこれを許可した。

田原藩御用人方日記（畢山文庫蔵）元治元年 1 月 11 日の条によれば

1. 火縄筒稽古之儀、雷管銃取交御用相成候処、追々西洋陣法ニ御改正ニ付、以後御学校ニ而御世話無之候。依之指南世話役之者御免被仰付候。尤為自分嗜候儀は勝手次第可致候。

右之趣、御家中一統支配組下江茂可申達候。以上とある。

村上定平は文化5年7月11日に17俵2人扶持の山浜代官村上財右エ門の長男として田原に生まれた。生来の素質と格別の勉励により、天保2年23才にして成章館素読指南となってから明治元年までの間に槍術、柔術世話役、兵学助教、剣術、炮術、銃陣指南、学校掛り等を務めた。村上の出世は天保3年5月に畢山が藩老に就任してからで、畢山は村上を高く評価し将来は日本的人物になると期待していた。はたして後には尾張、三河、駿河、遠江の諸藩の炮術指導をし、安政5年5月11日には高80石で異例の家老職に就き、明治2年11月24日には高120石で田原藩大参事に任命された。

文久2年5月20日の田原藩主康和日記「在府中諸事覚」(畢山文庫蔵)によれば伴の定平(この頃定平は家名の財右エ門を襲名)とともに19日幕府講武所の炮術方教授に任命された。⁽⁹⁾いかに幕末動乱の時とはいえ17俵2人扶持の下級の士から老職に進んだ者は田原藩では他に例を見ない。勿論幕府に登用された者など皆無である。彼の非凡さによるものである。

又、村上が最も親しく交った師友は「水戸藩士藤田東湖、尾張藩士多宮如雪、葦山代官江川英龍、同手代斉藤弥九郎、幕臣下曾根金三郎、幕医大規俊斉、小田原の二宮尊徳、松代藩士佐久間象山、高野長英、小関三英、同藩では渡辺畢山、真木定前、鈴木春山、上田喜作」⁽¹⁰⁾等で当代一流の人士と多く交っており、彼の交友関係からも、その人物が知られる。

兵 杖

無比流である。無比無敵流ともいい、佐々木哲斉徳久を流祖とする。関ヶ原合戦の実戦より会得したと伝えられる。現在も水戸付近には伝承している。これもおそらく江戸詰の藩士が江戸で学び田原に持ち帰ったものと思われる。

馬 術

高麗流である。この流儀は成章館の他館林、苗木、仙台の各藩でも行なわれていた。武芸流派大事典によれば「遠祖は百済王から阿直岐という者を添えて良馬二疋を応神天皇に献じたことが日本記にある。阿直岐は馬術

にすぐれていたので公卿達が教えを乞うた。その内容を簡単に記した伝を高麗の阿直岐の伝、または高麗流といい、後人がそれを補訂して馬書が出来た。相模の中原湯山入道玄性を流祖とする⁽¹¹⁾とある。

田原藩への流入は江戸詰の士が館林、苗木、仙台の三藩のいずれかから学んだものと思われるが確証はない。

3. 指南または世話役

指南または世話役は荻野流炮術指南の井上空衛が岡崎藩士であった他は全員田原藩士で、しかも本職からの兼務であった。身分の低い者でも技術、人物に優れた者は師南や世話役に任じられたので、文化7年9月の藩主三宅康和諭達書⁽¹⁾にも

1. 諸芸上達の人はいふ己より軽輩たるとも賤しむべからず
1. 部屋住亦童子の中諸芸相励み御奉公の基を仕立つる事肝要なり、然れば応対進退の礼節をも心得べき事なれば、其の奉公の基を教へらる人は即其の業々の師範なれば其思儀は君父と同様なり、左すれば、元日五節には其の師範々々へ賀謝すべき事、又朔望には起居安否となく伺候すべき事

とあり

指南や世話役に対する心得が示されたものと思われる。

師南または世話役は開館より閉館までの約61年間に、田原藩日記類に記載されている者の総実数136名、二芸以上を兼ねた者が多かったので延数232名であった。

〔1〕 10年以上指南または世話役

10年以上指南または世話役を務めた者は、文化7年9月17日の開館より明治4年7月14日の閉館までの約61年間に実数28名、延数では二芸以上に渡る者が多かったので、剣術16名（両流に渡る者がいたので、直心流13名、無念流4名）、槍術10名、弓術8名、柔術8名、炮術5名（数流に渡る者がいたので、荻野流5名、西洋流3名、外記流1名）、居合7名、兵杖6名、馬術4名、兵学2名、銃陣3名で計69名であった。

また、これ等の内七芸の者は二村二三二（直心流，無念流剣術，弓術，柔術，居合，兵杖，馬術，銃陣）の1名，六芸の者は二村左太夫（直心流剣術，槍術，弓術，柔術，居合，兵杖），村上定平（無念流剣術，槍術，柔術，萩野流，西洋流炮術，兵学，銃陣）の2名，五芸の者は萱生七郎（直心流剣術，槍術，柔術，居合，兵杖）の1名，四芸の者は天野幸右エ門（直心流剣術，柔術，居合，兵杖），川澄安治（直心流剣術，柔術，居合，兵杖），三浦舎人（直心流剣術，萩野流，西洋流炮術，馬術，銃陣）の3名，その他三芸の者が5名で，永年勤続者に多芸の者が多い。また三浦舎人を除いて全員が剣術と柔術を兼ねている。このことは当時の武芸修行は，実戦の場合の組打に具えて剣術と柔術を合せ行なったことを物語るものである。

萱生源左エ門 柔術，居合，兵杖の三芸

文化7年9月17日の開館より文政5年7月26日死亡までの13年間に，文化12年上半期江戸詰の時を除き12年半柔術，居合，兵杖指南，文化8年と文政4年5年の2年間は成章館掛りを兼ねた。

土井幽信 直心流剣術の一芸

文政5年喜左エ門を幽信と改名。文化7年より天保2年11月1日死亡まで20年間直心流剣術指南。

萱生七郎 直心流剣術，槍術，柔術，居合，兵杖の五芸

源左エ門の子，文政6年源左エ門を襲名。文化14年より天保11年まで，途中大阪加藩のため文政7年を除き23年間柔術指南。文政5年より居合，兵杖指南を兼ね，文政9年よりは剣術世話役を，文政11年よりは槍術世話役も兼ね，天保6年より直心流剣術，槍術，柔術，居合，兵杖指南となる。天保10年槍術指南を免ぜられ，天保11年には剣術指南のみとなり‘11月30日に隠居した。

大島祐左エ門 槍術の一芸

文政4年又蔵を祐左エ門と改名。文政元年より天保元年まで13年間槍術指南。文政5年7月26日萱生源左エ門死亡後の成章館掛り後役となり文政9年まで務めた。

奥田新六郎 槍術の一芸

文政元年より文政10年7月14日死亡まで10年間槍術指南。

雪吹伊織 弓術，炮術（外記流，荻野流，西洋流），兵学の三芸

文政2年より万延元年まで途中天保5年6年を除く38年間弓術指南，天保4年より万延元年まで兵学指南。天保8年外記流炮術世話役，天保9年に荻野流炮術世話役，10年には指南となり，嘉永3年より万延元年までは西洋流炮術指南を兼ねる。文化10年より12年までは素読指南も務めた。

二村左太夫 直心流剣術，槍術，弓術，柔術，居合，兵杖の六芸

文政7年左市を左太夫と改名。文政4年より天保2年までの11年間に，文政4年より10年まで直心流剣術世話役，文政9年弓術指南，槍術世話役となり，文政10年には柔術，兵杖指南，剣術，槍術世話役となり，文政12年には槍術も指南となる。天保2年に至って槍術指南のみとなった。

光用豊山 直心流剣術の一芸

天保7年隠居して三九郎を豊山と改名。隠居後も指南を継続した。文政5年より天保9年まで15年間直心流剣術指南。文政9年より12年までは成章館掛りを務めた。

渥美九平 槍術，柔術，居合の三芸

弘化4年紇を九平と改名。文政12年より慶応2年までの37年間に，文政12年に槍術世話役となり，天保6年より居合世話役，天保7年には柔術世話役を兼ね，天保12年に槍術指南，嘉永5年よりは柔術，居合指南も兼ねて慶応2年に至る。文政6年には素読指南も務めた。

天野孝右エ門 直心流剣術，柔術，居合，兵杖の四芸

天保2年より弘化4年までの17年間に，天保2年に直心流剣術，柔術，兵杖世話役となり，天保5年には柔術，居合世話役となり，天保7年再び兵杖世話役を兼ねて弘化4年に至る。但し弘化4年には居合の会日少なく，世話役は置かれなかった。

二村二三二 剣術（直心流・無念流），弓術，柔術，居合，兵杖，馬術，銃陣の七芸

天保4年より明治元年までの36年間に，天保4年直心流剣術，柔術，居合，兵杖世話役，天保7年より10年まで柔術，居合世話役，10年には兵杖

も再び世話役，その間天保7年より9年までは木馬指南も兼ねた。11年には再び直心流剣術世話役となり，12年には助教，嘉永元年より4年まで無念流剣術助教となる。天保11年より嘉永4年までは柔術，居合，兵杖，木馬および馬術指南。天保14年銃陣指南，弘化3年と明治元年世話役，弘化2年には弓術指南。

村上定平 無念流剣術，槍術，柔術，炮術（荻野流・西洋流），銃陣，兵学の六芸

安政2年家名の財右エ門を襲名。天保4年より明治元年までの36年間に，天保4年より弘化4年まで槍術世話役，天保5年より11年まで柔術世話役，天保8年より慶応2年まで無念流剣術指南，天保11年より荻野流炮術世話役となり，弘化2年よりは指南。

天保14年西洋流炮術助教となり，弘化2年には指南となり明治元年に至る。この間嘉永6年雪吹伊織大阪出張中は兵学助教，元治元年には銃陣指南，天保12年より弘化3年までと，嘉永元年より安政5年までは成章館掛りとなり，天保2年には素読指南も務めた。

間瀬弘人 弓術の一芸

天保5年より弘化4年までの間に，天保11年より弘化元年までの3年間を除き，11年間弓術世話役。天保元年より5年までは素読指南も務めた。

三浦舎人 直心流剣術，炮術（荻野流，西洋流），銃陣，馬術の四芸

弘化2年舎人を平馬と改名。天保5年より嘉永元年まで15年間直心流剣術世話役。天保10年より14年まで荻野流炮術世話役，安政2年には西洋流炮術，馬術世話役，明治元年銃陣世話役。万延元年より文久2年までは素読指南も務めた。

鍋木矢六 直心流剣術，槍術の二芸

慶応2年矢六を衛門と改名。天保6年より慶応2年までの32年間に，天保6年直心流剣術世話役となり，万延元年助教，文久元年指南となり慶応2年に至る。この間天保10年より12年まで槍術世話役，弘化4年に再び槍術世話役を務め，天保6年より9年までは素読指南も務めた。

大島介助 槍術の一芸

天保14年介助を勇左エ門と改名。天保6年より弘化2年まで12年間鎗術世話役。

玉置恒右エ門 弓術，荻野流炮術の二芸

天保14年恒右エ門を市郎兵衛と改名。天保9年より嘉永6年までに，嘉永元年より5年までを除く11年間弓術世話役。弘化3年には，荻野流炮術世話役。

吉住吉右エ門 直心流剣術の一芸

天保10年より嘉永元年まで10年間直心流剣術世話役。

金田応三 直心流剣術，弓術の二芸

天保10年より嘉永4年までの13年間に，天保10年11年は弓術世話役，12年より14年までは助教，それより嘉永4年までは再び世話役となる。嘉永2年より4年までは直心流剣術世話役。

佐藤四郎左エ門 直心流剣術の一芸

天保14年半助を四郎左エ門と改名，更に嘉永6年よりは皆空と称した。天保10年より万延元年9月27日死亡まで22年間直心流剣術指南。

村井常次郎 荻野流炮術の一芸

天保11年より嘉永2年まで10年間荻野流炮術世話役

生田奎助 無念流剣術，槍術，西洋流炮術の三芸

弘化4年より慶応2年までの12年間に，弘化4年無念流剣術世話役。元治元年より慶応2年までは指南。この間安政6年には西洋流炮術世話役，文久3年には槍術世話役も兼ねた。万延元年には成章館掛りも務めている。

光用弥五左エ門 弓術の一芸

嘉永元年より慶応3年までに，嘉永6年より文久元年に至る7年間を除く13年間に，嘉永元年より4年まで弓術世話役，文久2年に弓術指南となり慶応3年に至る。

川澄安治 直心流剣術，柔術，居合，兵杖の四芸

嘉永4年より文久3年までの13年間に，嘉永4年直心流剣術，柔術，居合，兵杖の各世話役となり，剣術は安政元年に免ぜられ，兵杖は安政2年に指南となり，文久3年に至る。

戸田角弥 槍術，馬術の二芸

安政元年より明治元年までの間に，安政2年より4年までの3年間を除く12年間に安政元年と文久3年，慶応2年と3年の4年間槍術世話役，安政5年より明治元年まで馬術世話役。

大嶋又蔵 直心流剣術，弓術，馬術の三芸

慶応元年又蔵を祐左エ門と改名。安政3年より慶応2年までの10年間に，安政3年より元治元年まで直心流剣術世話役，文久2年には弓術世話役，慶応元年と2年は馬術世話役。

近藤 勇 無念流剣術の一芸

安政3年より慶応元年までの10年間無念流剣術世話役。安政3年4年と万延元年より文久2年までは素読指南も務めた。

この他，直心流剣術指南の上条無角が文政2年より9年までの8年間，上条喜兵衛が直心流剣術世話役を文政10年より天保4年までの7年間務めており，同一人物説，親子説があり定めがたい。

〔2〕 10年以下，二芸以上指南または世話役

10年以上指南または世話役を務めた者を除いて，二芸以上指南または世話役を務めた者は，実数40名，延数では二芸以上に渡る者がいたので剣術11名（直心流6名，無念流5名），槍術3名，弓術9名，柔術11名，炮術20名（二流に渡る者がいたので，荻野流5名，西洋流16名），居合12名，兵杖9名，馬術5名（内木馬1名），兵学なし，銃陣14名，三ツ道具1名で計95名である。

この区分では六芸，五芸の者はなく，四芸が萱生六左エ門（柔術，居合，兵杖，木馬），萱生彦四郎（直心流剣術，柔術，居合，兵杖），鈴木左司馬（無念流剣術，槍術，荻野流・西洋流炮術，銃陣），萱生健治（直心流剣術，柔術，居合，兵杖）の4名で三芸になると12名あり，ここでも多芸の者が多く見られる。これは当時は多くの武芸を修業したことを示すものである。

文久3年頃よりは炮術と銃陣が多くなっている。このことは外国からの脅威に対処するには従来からの武芸では不備であり，新しい炮術とか銃陣

が重視されるようになった事を示すものと思われる。

斉藤寛吉 弓術，荻野流炮術の二芸

文政9年より天保元年までの5年間弓術世話役。天保11年と12年に荻野流炮術世話役。文政8年より11年までは素読指南も務めた。

本多卯三郎 居合，兵杖の二芸

天保6年に居合，兵杖指南。天保6年と7年には足軽素読指南も務めた。

岡本喜代作 柔術，居合の二芸

天保6年に柔術，居合指南。

間瀬映助 柔術，居合の二芸

天保6年に柔術，居合指南。

井上半吾 荻野流炮術，三ツ道具の二芸

天保7年に三ツ道具指南，天保10年に足軽方荻野流炮術世話役。

萱生六左エ門 柔術，居合，兵杖，木馬の四芸

光岡豊山の子。天保9年と10年に柔術，居合，兵杖，木馬の世話役。

河辺磯吉 柔術，居合の二芸

天保10年と11年に柔術，居合の世話役。

村上国助 無念流剣術，弓術，荻野流炮術の三芸

天保10年より13年まで荻野流炮術世話役。弘化2年は弓術世話役。嘉永3年には無念流剣術世話役。

加藤 只助 柔術 居合，兵杖の三芸

天保13年より弘化2年まで柔術，居合，兵杖世話役。

奥田有右エ門 弓術，馬術の二芸

天保13年より弘化2年まで馬術世話役，弘化2年には弓術世話役。

坂倉安右エ門 直心流剣術，弓術の二芸

弘化元年に弓術助教，弘化3年は世話役，4年には直心流剣術世話役。

天野兼助 柔術，居合，兵杖の三芸

弘化2年に柔術，居合，兵杖の世話役。

川澄 鼎 直心流剣術，荻野流炮術の二芸

弘化4年に荻野流炮術世話役，嘉永元年に直心流剣術世話役。

加藤皆助 柔術，兵杖の二芸

弘化4年に柔術，兵杖世話役。

萱生健治 直心流剣術，柔術，居合，兵杖の四芸

嘉永6年より安政3年まで直心流剣術，柔術，居合世話役。嘉永6年より安政2年まで兵杖世話役。

川澄訓兵衛 弓術，西洋流炮術，馬術の三芸

嘉永6年より安政2年まで馬術世話役，安政3年より5年までは指南，嘉永6年より安政5年までは西洋流炮術世話役，嘉永6年は弓術世話役。

奥田九八郎 弓術，馬術の二芸

嘉永6年に弓術世話役，嘉永6年より安政2年までは馬術世話役。

佐藤松次郎 無念流剣術，槍術，馬術の三芸

安政2年に槍術世話役。安政3年は無念流剣術，馬術世話役。

萱生彦四郎 直心流剣術，柔術，居合，兵杖の四芸

安政3年より万延元年まで直心流剣術，柔術，居合，兵杖世話役。

渥美源之助 柔術，居合，西洋流炮術の三芸

安政3年に西洋流炮術世話役，元治元年に柔術，居合世話役，明治3年には柔術指南。

佐藤織衛 弓術，西洋流炮術の二芸

安政4年より万延元年まで弓術世話役。安政6年より文久元年まで西洋流炮術世話役，文久2年と3年は指南。

佐藤 進 槍術，西洋流炮術，銃陣の三芸

安政6年に槍術世話役，慶応3年に西洋流炮術，銃陣の各世話役。

村上庸助 無念流剣術，西洋流炮術，銃陣の三芸

安政6年に無念流剣術，西洋流炮術，銃陣の各世話役。

村上則蔵 弓術，柔術，西洋流炮術の三芸

安政6年に弓術世話役，慶応2年に柔術世話役，明治2年と3年は大砲司令。

鈴木左司馬 無念流剣術，槍術，炮術（荻野流・西洋流），銃陣の四芸

安政6年に荻野流炮術世話役，万延元年と2年に西洋流炮術，槍術世話

役，文久元年より3年まで無念流剣術世話役，慶応元年は銃陣世話役。

坂倉新平 西洋流炮術，銃陣の二芸

安政6年と万延元年に西洋流炮術世話役，安政6年に銃陣指南。

赤井兵衛 弓術，西洋流炮術の二芸

文久2年と3年に弓術世話役，文久3年に西洋流炮術世話役，安政3年には素読指南も務めた。

佐野岡右エ門 柔術 居合の二芸

文久3年に柔術，居合世話役。

鈴木俊蔵 柔術，居合，兵杖の三芸

文久3年に柔術，居合世話役，慶応元年に兵杖世話役。

上田九左エ門 西洋流炮術，銃陣の二芸

文久3年に銃陣世話役，慶応3年は銃陣農兵教授，西洋流炮術世話役。

稲熊芳之助 無念流剣術，西洋流炮術，銃陣の三芸

文久3年に無念流剣術世話役，元治元年に西洋流炮術，銃陣世話役，明治3年は銃陣農兵世話役。

岡田丈吉 直心流剣術，銃陣の二芸

元治元年より慶応3年まで直心流剣術世話役，慶応3年は銃陣も世話役。

村上 司 直心流剣術，西洋流炮術，銃陣の三芸

元治元年より慶応2年まで西洋流炮術世話役，慶応元年と2年，明治元年より3年まで直心流剣術世話役，慶応2年には銃陣も世話役。

川澄又太郎 直心流剣術，銃陣の二芸

慶応元年と2年直心流剣術世話役，慶応2年と明治元年には銃陣世話役。慶応3年は童子素読指南も務めた。

斉藤 斉 西洋流炮術，銃陣の二芸

慶応元年に西洋流炮術，銃陣世話役。

神谷儀左エ門 柔術，兵杖，銃陣の三芸

慶応2年に柔術，兵杖，銃陣世話役，慶応3年には銃陣のみ世話役。

萱生七郎 西洋流炮術，銃陣の二芸

前出七郎の子。慶応2年に西洋流炮術，銃陣世話役。

雪吹 哈 西洋流炮術，銃陣の二芸

慶応3年に西洋流炮術，銃陣世話役。

村上定平 西洋流炮術，銃陣の二芸

先代定平の子，慶応2年と明治元年に西洋流炮術世話役，明治元年に銃陣世話役。

〔3〕 10年以下一芸のみ指南または世話役

10年以下一芸のみ指南または世話役を務めた者は実数68名で剣術23名（直心流16名，無念流7名），槍術5名，弓術6名，柔術5名，炮術10名（荻野流5名，西洋流5名），居合なし，兵杖2名，馬術6名（内木馬2名），銃陣11名であった。

この区分で目立つことは，文久2年以後炮術，銃陣が増している反面，槍術，弓術，柔術，兵杖が減少し，居合に至っては皆無となっている。このことは10年以下二芸以上指南または世話役の項で述べた如く，時代の要請を反映したものと思われる。

大島又蔵

文化7年槍術指南

佐藤揮空

文化7年直心流剣術指南

松岡直透

文化7年直心流剣術指南

上条覚右エ門

文化7年直心流剣術指南

土井喜左エ門

文化7年より12年まで直心流剣術指南

小川彦十郎

文化9年と10年馬術世話役，11年より14年まで指南

岡本九太夫

文化9年と10年馬術世話役，11年と12年指南

川澄又次郎

文化12年上半期，萱生源左エ門江戸詰中柔術世話役
生田奎助

文化12年上半期，萱生源左エ門江戸詰中柔術世話役
小川不有

文政2年に弓術世話役
三浦金太夫

文政4年より7年まで直心流剣術世話役
八木不及

文政5年と6年に槍術世話役
稲熊奎右エ門

文政7年と8年に槍術世話役
河合衛守

文政7年より9年までと，12年より天保2年まで直心流剣術世話役
坂倉力五郎

文政11年に直心流剣術世話役
大島晋介

天保元年に槍術世話役
土井古右エ門

天保2年より4年まで弓術世話役
鈴木弥太夫

天保2年に槍術指南
村上作太夫

天保2年に馬術世話役
河合平左エ門

天保4年より6年まで直心流剣術世話役
奥田広吉

天保5年より7年まで弓術世話役
長尾助六

天保6年と7年，天保11年と12年直心流剣術世話役

杉山長左エ門

天保6年より8年まで直心流剣術世話役

金田万之丞

天保6年に柔術指南

井上奎衛 岡崎藩士

天保8年に荻野流炮術指南

矢田多五郎

天保10年に足軽方荻野流炮術世話役

大羽泰藏

天保10年に足軽方荻野流炮術世話役

山本庄藏

天保10年に足軽方荻野流炮術世話役

川澄繁吉

天保10年と11年に無念流剣術世話役

生田孫市

天保13年と14年に無念流剣術世話役

中村三八郎

天保14年より弘化2年まで荻野流炮術世話役

夏目綱平

弘化2年に無念流剣術助教

間瀬九右エ門

弘化2年より4年まで弓術世話役

坂倉安右エ門

弘化3年に弓術世話役

夏目善左エ門

弘化4年，嘉永元年と5年，安政2年と3年に無念流剣術世話役

土井廉藏

嘉永3年に銃陣世話役

永田清左エ門

嘉永 4 年と安政 2 年に直心流剣術世話役

山本哲三郎

嘉永 4 年に無念流剣術世話役

積熊□□

嘉永 4 年に木馬世話役

村松清兵衛

嘉永 5 年より安政 2 年まで馬術指南

稲熊徳蔵

安政元年に無念流剣術世話役

小山市兵衛

安政 2 年より 5 年まで直心流剣術世話役

松坂与三郎

安政 3 年より 6 年まで無念流剣術世話役

鈴木要齊

安政 4 年より 6 年まで兵杖世話役

鈴木孫次郎

万延元年より安政 6 年まで兵杖世話役

日高弥吉

文久 2 年に西洋流炮術世話役

永井清左エ門

文久 2 年に直心流剣術世話役

鈴木弦之丞

文久 3 年に銃陣世話役

上田為太郎

文久 3 年に銃陣世話役

中村大太郎

文久 3 年に銃陣世話役

市川十郎

元治元年に銃陣世話役

長尾市右エ門

慶応元年に直心流剣術世話役

雪吹男也

慶応元年に西洋流炮術世話役

小田政平

慶応元年に西洋流炮術世話役

神谷恕吉

慶応元年に柔術世話役

斉藤式エ門

慶応2年に西洋流炮術世話役

三浦平馬

慶応2年より明治元年まで銃陣世話役

中村市助

慶応3年に木馬世話役

山田算衛

慶応3年と明治元年に銃陣世話役

富田 一

明治元年より4年まで剣術方頭取

上田勇次

明治元年と3年直心流剣術世話役

山本覚左エ門

明治元年に西洋流炮術世話役

市野治兵衛

明治元年馬術世話役, 2年に頭取, 3年は乗馬方

岡本安之助

明治元年に銃陣世話役, 主として農兵世話役

土井又六郎

明治元年に銃陣世話役

稲熊民衛

明治元年に銃陣世話役

井上喜代二

明治元年に銃陣世話役

渥美平兵衛

明治3年に柔術世話役

〔4〕 指南または世話役数

下表は開館より閉館までの約61年間の指南または世話役の延数である。

これより見る限り指導者数のみによって必ずしも優劣はつけがたいが、20名以上のものは剣術の50名を筆頭とし、以下炮術35名、銃陣28名、柔術24名、弓術23名の順となっている。しかし、炮術は61年間の内天保8年より明治2年までの32年間、銃陣は天保14年より明治元年までの26年間であったことを思えば、その比率は極めて高いもので

種目	区分	10年以上	10年以下	一芸のみ	計
		指南, 世話	二芸以上 指南, 世話	指南, 世話	
剣	術	16	11	23	50
	直	13	6	16	35
	無	4	5	7	16
槍	術	10	3	5	18
弓	術	3	9	6	23
柔	術	3	11	5	24
炮	術	5	20	10	35
	荻	5	5	5	15
	西	3	16	5	24
	外	1	0	0	1
居	合	7	12	0	19
兵	杖	6	9	2	17
馬	術	4	5	6	15
兵	学	2	0	0	2
銃	陣	3	14	11	28
三ツ道具		0	1	0	1
計		69	95	68	232

※ 直は直心流, 無は無念流, 荻は荻野流, 西は西洋流, 外は外記流, 剣術, 炮術は数流を兼ねている。

ある。剣術は武士たる者は誰しも履習すべきものといったことを示し、炮術、銃陣は田原藩玄関置帳(崋山文庫蔵)嘉永6年10月の条に見るが如き幕命にも依るが、田原藩が急速く時代の趨勢を予見し武備の改革に踏み切ったことの表れと思われる。

剣術においては直心流は関館より閉館までの約61年間、無念流は天保8年より慶応2年までの31年間であったが、田原藩のお家芸であった直心流の比率が稍高い。

炮術においては荻野流は天保8年より文久3年までの27年間、西洋流は天保14年より明治2年までの27年間で、しかも嘉永3年よりは藩の炮術が西洋流になったことを思えば、荻野流の履習者も、かなり多かったものと思われる。

その他の諸芸については特に取り上げるものは見当らない。

4. 二の丸宮総家中射行と成章館指南または世話役

二の丸宮総家中射行は毎年10月23日に田原城二の丸宮の祭典行事として一人6射で競われた。別表一覧表は、この射行で3番中までに入った者の表である。成章館の指南または世話役で3番中以内に入っているのは、10年以上指南または世話役では雪吹伊織(弓術, 荻野流・西洋流炮術, 兵学), 村上定平(無念流剣術, 槍術, 柔術, 荻野流・西洋流炮術, 銃陣, 兵学), 大島祐左エ門(直心流剣術, 弓術, 馬術), 間瀬弘人(弓術), 萱生源左エ門(柔術, 居合, 兵杖), 上条喜兵衛(直心流剣術), 金田応造(直心流剣術, 弓術), 村井常次郎(荻野流炮術), 渥美紘(槍術, 柔術, 居合), 鎗木矢六(直心流剣術, 槍術), 光用弥五左エ門(弓術)の11名で、10年以下二芸以上指南または世話役では斉藤寛吉(弓術, 荻野流炮術), 村上国助(無念流剣術, 弓術, 荻野流炮術)の2名、10年以下一芸のみ指南または世話役では土井古右エ門(弓術), 奥田広吉(弓術), 小山市兵衛(直心流剣術), 土井広蔵(銃陣), 坂倉力五郎(直心流剣術)の5名で、その他として生田謙吉が素読指南を天保2年に、鈴木司馬助が天保7年より9年まで務めており、総数37名の内20名が名を連ねているに過ぎない。一番中では20回の内、雪吹伊織7回、村井常次郎2回、土井古右エ門、生田謙吉、萱生源左エ門、上条喜兵衛、金田応造、間瀬弘人、鎗木矢六、小山市兵衛各1回で計17回を占めている。中でも弓術指南を38年間務めた雪吹伊織が7回で断然他を引離しているのはさすがである。しかし弓術関係は雪吹、土井、金

二の丸宮田原藩総家中射行成績一覧表（田原藩日記による）

△毎年10月23日城中二の丸宮祭典行事，1人6射

年 号	西暦	一 番 中 的中 氏 名	二 番 中 的中 氏 名	三 番 中 的中 氏 名	備 考
文政5年	1822	5 雪吹伊織	5 生田何右エ門	4 近藤助五郎	文政4年以前射行なし
〃 6年	1823	5 雪吹伊織	5 赤井 轉	4 上條左膳	
〃 7年	1824	4 生田何右エ門	4 雪吹伊織	4 二村佐次兵衛	
〃 8年	1825	土井古右エ門	大島祐左エ門	坂倉力五郎	的中数記録なし
〃 9年	1826				家中給米禄滞り射行中止
〃 10年	1827				殿様逝去により射行中止
〃 11年	1828				新君服穢中により射行中止
〃 12年	1829	6 雪吹伊織	4 村上定平	3 間瀬弘人	
天保1年	1830	5 生田鎌吉	4 赤井覚右エ門	4 丹羽豊右エ門	
〃 2年	1831	6 松岡 貢	4 奥田源次郎	4 鎌木三郎左エ門	
〃 3年	1832	3 萱生源左エ門	3 赤井覚右エ門	3 斎藤寛吉	
〃 4年	1833	6 上條喜兵衛	4 奥田広吉	3 河辺甚右エ門	
〃 5年	1834	6 金田應造	5 戸田熊蔵	3 木下半外	雪吹伊織は痛所欠席
〃 6年	1835	5 雪吹伊織	4 間瀬弘人	3 村井常次郎	
〃 7年	1836	5 間瀬弘人	5 雪吹伊織	3 斎藤寛吉	
〃 8年	1837	6 雪吹伊織	5 鈴木司馬助	4 大羽孫兵衛	
〃 9年	1838	6 雪吹伊織	4 鈴木司馬助	3 間瀬 鼎	
〃 10年	1839	5 雪吹伊織	4 間瀬弘人	3 渥美 紉	
〃 11年	1840	6 鎌木矢六	5 光用弥五左エ門	4 雪吹伊織	
〃 12年	1841				預り人華山自刃のため中止
〃 13年	1842	6 村井常次郎	5 光用弥五左エ門	5 雪吹伊織	
〃 14年	1843	4 井上忠左エ門	2 土井古右エ門	2 小山庄助	
弘化1年	1844				雨天のため射行中止
〃 2年	1845	6 村井常次郎	4 光用弥五左エ門	4 村上国助	これより8ヶ年射行なし
安政1年	1854	小山市兵衛	大島又蔵	土井広蔵	的中記録なしこれより射行なし

田，間瀬の4名に過ぎず，弓術関係以外の指南または世話役で，村井，生田謙，萱生，上条，鍋木，小山の6名と指南や世話役を務めた事の無い，生田何，松岡，井上の3名が一番中になっている。これに反し射行実施期間中に弓術指南または世話役を務めた二村二三二，玉置恒右エ門，間瀬九右エ門，奥田右左エ門，坂倉安右エ門が三番中までに入っていない。的中率のみから見れば，雪吹を除いて，弓術指南や世話役と，その他の者の間に大きな開きは無かったものと思われる。この傾向は二番中でも殆んど同じで，三番中になると弓術関係者以外の者の率が更に高くなっている。このことは指南や世話役といっても飛び抜けて優れた者ではなく，藩士の中で上手と言われた程度であったと推察せられる。雪吹でさえも他藩に広く知られたと言う記録は無い。他は推して知るべしである。

5. む す び

以上成章館の武芸流派とその指南または世話役を一応明らかにしたわけであるが，武芸流派で特記すべきものとしては，柔術，居合の直義流の如く全国で唯田原藩のみで行なわれたものがあり，何故これが他に広められなかったかが解明されないが，恐らく渥美半島といった他藩との接触の少ない小藩であったと言う地理的条件と天下に知られるが如き使手が現われなかった等が，その主たる原因と考えられる。又，炮術が重視せられ幕末になるや諸藩に先駆け西洋流を取り入れた事は村上定平父子の如き優秀な人物に恵まれた事にもよるが田原藩が海防上の見地から幕命を待つことなく逸速く時勢の赴くところを予見したからで，華山自刃後とはいえ，華山が藩の老臣として藩を指導した事が大きく影響しているものと思われる。

又，文化7年9月17日の開館より明治4年7月14日の閉館に至る約61年間に指南または世話役は実数136名，二芸以上を兼ねた者が多数いたので延数では232名の多きに達した。これは岡崎藩士井上奎衛の炮術指南を除き総て田原藩士で藩の諸役との兼務であった為と更に江戸詰があり，又，大阪加番をしばしば務めている等の理由によると思われる。

(注)

(1) 拙稿中京大学教養論叢16巻4号 236頁

(2) 拙稿中京大学教養論叢16巻4号 238頁

(3) 〃 229頁

(4) 愛知県著，愛知県史（愛知県）昭和45年 794頁

武芸の指南にも村上範致の如き偉材があった……彼によって藩の剣法は，直心流より無念流に一変した。

(5) 綿谷 雪，山田忠文編 武芸流派大事典（新人物往来社）昭和44年 497頁

(6) 居組直義流傳許状（崋山文庫蔵）

居組直義流傳許状

右目錄記前書之通古今今伝

来之傳数多雖学知猶更先定

明利令短作則号居組直義

流貴殿深御執心有況銘肝

不観多歳寒温粉骨因被致

執行相叶天道之正理候因

茲弔傳一流聊以無隔心令伝

授之況以此趣弟子可有御取

候自今以後極意深意懇

望之輩於有之者窺其者

之心一七日撰精進誓詞血判

之上可被相授候雖然於臆

病之者全不可有相伝者也

仍而許状如件

浜野弥兵衛

直義

宝永五戊子五月十五日

杉山莊九郎

直常

川澄次左衛門

昌行

天野幸右衛門

遠数

萱生源左衛門

居組直義流傳

極意玉之身

秘伝

日月明カナレ尼黒雲

隔レハ正カラス一心

叶サレハ勝利行難
 右者能之可極一心共儀專一也
 抑此先定明利者目錄之俚
 押也師匠致奥意堅相伝可
 為無用此外口伝雖多々難尽
 紙仍極意如件

⋮

起請文ノ事
 一、貴殿流儀致深意懇望候
 因茲御伝授之趣猥他見
 申間鋪候毛頭於簾末仕
 者日本六十余州之
 御神別而
 魔利支尊天蒙御罰可
 申候仍誓詞血判如件

浜野弥兵衛
 直義

宝永五戌子歳五月十五日

杉山莊九郎
 直常

川澄次左衛門
 昌行

天野幸右衛門
 遠数

壹生源左衛門
 良聰

赤井彦右衛門
 栄達

(裏 面)

跋 文

井上義休從亡父良惣！学此術有年于茲父！
 没後從即亦学之六年！而芸妙術因今月今！
 日免許早

壹生源左衛門
 重英花押

文政十丁亥年五月吉日

井上平吉殿

(7) 遠藤早泉著 高島秋帆（健文社）昭和17年 165頁

大概如雲著 新撰洋学表（伯林社書店）昭和38年 126頁

(8) 田原藩御用人方日記（華山文庫蔵）喜永3年5月5日の条

雪 吹 伊 織

海防之儀ニ付先達而書面を以申立候趣、至極尤之儀ニ被思召候間、万端定平申談取調可申候。且、西洋流炮術便利之旨申立、別而奇特之儀御満足被思召、申立通御家中一統西洋流稽古いたし候様被仰付候、右ニ付其許場合、西洋流相学皆伝之上、定平申談御家中師範可致候、依之御羽織被下候。料五百疋

村 上 定 平

海防之儀ニ付、先達而書面を以申立候趣、尤之儀ニ思召候間、伊織申談取調可申、此度伊織儀西洋流炮術便利之旨申立ニ付、其意ニ御任セ被成、御家中一統西洋流稽古いたし候様仰付候間、左様相心得可申候、伊織場合は早々致皆伝、其上ニ御家中師範可申談候。依之御帷子被下候。料三百疋

(9) 藩主康保日記「在府中諸事覚」（華山文庫蔵）文久2年5月20日の条

一、昨夕講武所奉行大関肥後守の家来之者呼出ニ付、仙右衛門罷出候処、財右衛門、定平儀此度高島喜平炮術稽古之儀世話可致旨、無急度豊前守殿達有之候趣、書付ヲ以達シ有之、右ニ付御礼等之儀ハ無之、右仙右衛門罷出申出候。

右ニ付、財右衛門、定平江申達候処、今日定平金芝堀へ罷出候ニ付、明日兩人申達候事。

(10) 田原町文化財調査会編，田原町史中巻（田原町教育委員会）昭和50年 1081頁

(11) 綿谷雪，山田忠文編 武芸流派大事典（新人物往来社）昭和44年 243頁，344頁